

ヘッドライト

画用紙一面を真っ黒に塗りつぶし、真ん中に黄色で二つの丸を描いた絵。クレヨンの走った跡がはつきりとわかる。黒の上から黄色を丸く塗りたくったので、色が混じって汚く見える。

画用紙を持った手に、いまだにクレヨンの色がついてしまう。指先が黒くなった。それを見たときに、この絵を描いた時もこんな風に手を汚したことを思い出した。今よりもはるかに小さい自分の手が汚れている、そんな映像が頭の中に甦ってきた。

なぜ思い出すのだろう。あるいは、なぜ忘れるのだろう。なぜ今まで忘れていたのだろう。

映像と共に、感情も甦ってきた。それはこの絵を描いた当時の自分の感情だ。なにか心地良くない、それこそ忘れてしまいたい苦味があった。それは何だ。

褒めてもらえなかったのだ。胸を張って、誰かに自慢したい、そんな気持ちが打ち消されたのだ。工夫した、いい絵を描いたつもりだったのに、そうは見えてくれなかった。これは、何だ。

「どうしたの。こういうのじゃないでしょ。」そんな声がした。この絵を見た、そう、幼稚園の先生がそういった。それで僕はもう、自分からこの絵について何か言うことをやめた。同じような声は母からもかけられた。やはり僕は口をつぐんだ。

父親。口をつぐみながら僕は父をひたすら待った。そうだ。父が見てくれることを待ち望んだ。先生や母とは違う声をかけてくれることを、待った。

しかしこの期待が満たされたような感情は、今甦ってこない。期待は満たされなかった。映像は浮かんでくる。父は絵を見て笑った。父はいつも疲れていた。たまにしか見ない父の顔はいつも疲れて、眉にしわ寄せて寝ていた。父は絵を見て、疲れを背負ったままかすかに笑った。その絵がわかったのか、わからなかったのか、父はさびしそうに笑った。

父のその様子を思い出しても、やはり僕の中には苦い感情しか甦ってこない。父もその絵を褒めてはくれず、その絵がわからなかったのだ。

僕がなにを描いたのか、そのときの僕の発想はやはり、あの時のそして今の僕だけしか知らないのだ。それはやはり寂しいことだった。

子供の頃、夜は暗く怖いものだった。電気のスイッチを入れなければ家の廊下さえ闇に沈む。それは怖いものだった。まして戸外の、夜の闇などは。果てしなく深い闇だった。

しかし、父はその闇を超えて家に帰ってくる。夜の暗さなどなものでもない。スーパーロボットに乗り込んで戦うアニメの主人公みたいに、車のハンドルを操り、ヘッドライトで闇を照らしつけ、父は暗闇を駆け抜けて引き裂く。雄叫びのようなエンジン音がする。それが合図だ。

「お父さん帰ってきた？」

母が言い、僕はカーテンをすこし開いて恐々と外を覗く。どこかよその車が通り過ぎただけのときにはとてもがっかりする。平日の夜はたいていがっかりしていた。週末が待ち遠しかった。

二つのライトが煌々と、僕が覗いている窓を正面から照らしたとき、それは果てしない暗闇に勝利して父が帰ってきた姿そのものだった。その光は父そのものだった。

お父さんの絵を描きましよう、と言われて僕は迷いなく、夜の闇の中を駆けて家に帰りつくあの二つの光を描いた。それは僕の誇りだった。

でもそれは誰にも褒められなかった。わかってももらえなかった。「もう一回、お父さんの顔を描きましよう」と言われても頑として従わなかった。

絵を描いたのは十数年前、その父も僕が十歳の頃死んだ。僕は高校を卒業したあと家を離れた。その準備で部屋を整理している時に見つけた絵。どうしてこの絵を忘れていたのだろう。どうしてみつけたのだろう。なぜ、あの時の思いまで再び味わわないといけないんだろう。

ブレーキランプ

夕刻になると、赤い光の列が道路を埋める。たいていは、平日の決まった場所、同じような時間に、車が列をなす。それは住宅地に繋がる道路の交差点あたりで、皆が家へ帰ろうとしているのだ。その列に紛れこんでしまった僕は、赤い光が強くなったり弱くなったりするのを見ながらふと思う。

こんな風に、父が毎日家へ帰ってくるなど、なかった。

運のいいときには金曜の夜、大体は土曜の昼過ぎ、運の悪い時には土曜の夜、父は家へ帰ってくる。その「運の悪い時」には、僕は父と話も出来なかった。

食卓へ着くと背を丸めてかきこむようにご飯を詰め込みながら、母の話に耳を傾けつつ「うん」、「ほお」、「ああ」と相づちを打つ父。ひどく疲れているような父を避けるように、僕は「お風呂に入りなさい」、「もう寝なさい」という母に素直に従った。

そして父はまた仕事へと出て行く。運良く仕事場が近い時期には月曜の朝に、しかし大体は日曜の夕方ごろ、父は仕事へと車で出て行く。

作業服姿の父は、ボストンバッグとスーツを車の後部座席に積み、運転席にどさっと乗り込む。父は車を走らせて、次の週末まで帰ってこない。

家から七〇八十メートルむこう、雑貨屋が角にある最初の交差点のところで父はブレーキを踏み、見通しの良くない左右を確認してから、その向こうへと見えなくなる。

家の前に立って見えなくなるまで父の車の後姿を見る僕は、ブレーキランプが二つパツと光るまでなにか動いてはいけなような気がして、ただじつと道路の先を見ていた。

坂道発進

「こどもが乗っています」という文字が、吸盤でリアウインドウに付いている。そんな車に母親と子供が乗っている。たまに子供が後ろを向いてこちらを見てみると僕はおどけてみたりするが、あっちからこっちがちゃんと見えているかどうかはわからない。

僕が小さい頃乗せられていたのは自転車だった。前にはカゴ、後ろに子供シートをつけた自転車で、買物に連れられていった。橋の上を通るのがすこし怖かった。

そんな母が「車の免許を取りたい」と急に言い出したのは僕が小学二年くらいの頃だった。覚えているのは、父がやけに嬉しそうで、母よりも乗り気になっではしゃいでいたことだ。「どこまで進んでる？」と聞くのが家に帰った時の決まり文句で、本を開いて問題を出しては母に答えさせたりしていた。

仮免許を取ると、造成されたばかりでまだ家の立っていない住宅地まで日曜ごとに車で行き、そこで運転を交代して、父は助手席に座った。規定どおりの表示などつけずに秘密練習をした。坂道発進の練習をよくしていた。

普段は「タバコは控えて」、「もう食すぎでしょ」、「電話くらいできるじゃない」と父に小言を言うことが多い母が、そのときばかりは助手席からの指摘に「はい」、「はい」、といちいち素直に返事をしていた。

普段は言葉少なく、うたた寝ばかりして、細かいことを気にしない大らかな父が、クラッチの踏み方やエンジン音の変化など、一つ一つ指示をしていた。エンストすると母は苦笑いしてうつむいてしまうが、父は「あははは」と愉快そうだった。

僕は後部座席で退屈しながらそれを見ていた。

高校三年の十二月頃大学に合格すると、母は免許を取りにいつでもいいと言った。一月の初めから通い始めて二月の末に無事免許は取れた。教習中、僕は坂道発進がどれほど難しいものかとびくびくしていたが、実際してみるとそれほどでもなかった。父がやけに丁寧にやり方を説明する横顔、母が決まり悪そうにキーを回しなおす後姿。二人で仲良く横に並んでいたあの練習の様子を強く覚えていたからだ。

「坂道発進、うまいね」

教習コースの坂に停まって再び始動、それをするたびどの教官もそう言ってくれた。この点は父の方に似たんだ、と思った。僕には、父との秘密練習は必要なかっただろう。それでも、助手席に乗せてみたかったといまさら思う。

帰省

「お盆を故郷や行楽地で過ごそうという…」という声がニュースの時間に聞こえてくる。テレビ画面の中では、料金所が車で埋まっている。あの中に、どのくらいの家族がいるんだろう。どれほどの父親がいて母親がいて、どれほどの子供がぐずったり眠ったりトイレに行きたがったりしているんだろう。

お盆の時期には決まって父の故郷に向けて北へ走った。車で5時間以上の道のりは、子供の頃には永遠のように思えた。走っても走っても、いっこうに父の故郷が近づかないように思えた。なんとなく、異郷へ向かう怖さのようなものもあった。一年ぶりに祖母や伯母や従兄弟たちに会うことへの気恥ずかしさというだけではない、ぼんやりとした不安があった。

その果てしない道のりをたった一人で最後まで運転する父は、ヒーローのようだった。運転というものがとてつもない技だと思っていた子供の頃のこと、それを何時間も何時間も顔色一つ変えずにやり続けるのは、信じられないくらいの強さと勇気があるからだと思っていた。僕が眠りに落ちてしまって、またふと目覚めると外はすっかり暗い。まったくの未知の暗闇は恐ろしかった。ものすごい速さで走っているはずなのに、月が車の横にずつついて来るのは不気味だった。しかし父はそんな恐ろしさなどものともしない。

何時間もの道のり、多くは高速道路をまっすぐ走るとしても、いまよりそれがまだ短かった頃、一般道を走る時間も長かった。山の中の川沿いにくねる一本道。街道沿いの寂れた町並み。僕には今どこに在るのかなんてまるっきりわからなかった。いまここで僕が迷子になったら。ふと考えると、泣きたくなるほどだった。だが、この車は父が運転している。長い長い道のりを父は全く迷わず走る。父は全てを知っている。父は必ずこの旅を成功させる。

今、僕自身も車で帰省するようになった。数時間の運転がそれほど困難な大技でないと知った。それほどの道のりなら、毎年走る行程ならばなおさら、迷わず走るのも驚異の技ではないと知った。



ましてや、故郷へ向かう道だ。父が自分の故郷へ向かう道だ。自分の故郷へ向かう道を、忘れるはずはない。迷うはずはない。僕にとっては異郷への道でも、父には故郷への道だった。

船乗りの家の三男だった父は故郷を遠く離れた。船乗りにはならなかった。父の新たな場所は僕の故郷になった。僕が帰るのは、父が眠り、母が暮らすところ。

スピード違反

他の車が全然見えないガラガラの高速道路で、パトカーに止められたことがあった。ずっと追い越し車線を走っていた「通行帯違反」だということだった。一番近くのパーキングエリアに行ってパトカーの後部座席に入り、書類に書き込みをした。それが僕の初めての違反だった。

父は僕と違いスピード違反の常習だった。家族で車に乗っていると、スピードが上がったときの注意音が父と母の言い合いの原因になったものだ。違反して罰金をはらっても父は大して気にもしていなかった。

ある時、免停になった父がひどくしおれて見えたことがあった。それは免停そのものが原因ではなかった。

ある夜、もうそろそろ寝なさいと言われそうな時間に父から電話があった。それを受けた母は声を震わせていた。「お兄さんが？」とか、「もうだめなの？」という言葉で、僕にもなんとなくわかった。父の二番目のお兄さんは船乗りだった。笑い方が豪快な人で、お盆に陸に上がっていて運良く会えた時にはお小遣いをたくさんくれた。その伯父さんは船の上で倒れ、緊急に銚子で陸に上げられ病院に運ばれた。

土木技術者の父は現場に張り付いていることが多く、家には週末しかいなかった。仕事先の福島の宿舎で知らせを受けた父は車で銚子に向かい、そして既に息を引き取っていた伯父さんに病院で対面した。

電話を受けた母の様子を見て怖くなった自分は、寝かされた布団の中で父の言葉を思い出していた。父が、一番上のお兄さんの危篤に駆けつけたときのことだ。その時も父は車で北へ走った。父は走っている最中に眩暈のようなものを感じて仕方なかったという。車を飛ばせば飛ばすほどひどくなって、八十〜九十キロで走るのがやっとだった。こんな時に限って、と父は焦った。でも、お兄さんの死に目には会えた。父が着いて半日ほど後、お兄さんは息を引き取った。

「まだ間に合うから、急ぐなよ、ゆっくり来いよってことだったんだな」と父はその時のことを振り返ると笑いながら話してくれたものだ。「そういうことってのは、あるんだよ」と。お盆に帰省して仏壇に手を合わせた後の、穏やかな父の笑顔。遺影でしかその伯父さん知らない僕には、父のその笑顔の意味はよくわからなかった。

でも、二番目のお兄さんの時には、違ったのだ。父は間に合わなかった。違反を承知で

どんなに飛ばしても、だめだった。

免停の間、家に帰るときそしてまた仕事に向かう時、駅との往復にタクシーを使っていた。まだ母が免許を取る前のことだ。父が運転席でなく後部座席に乗り込む姿は、なにかあまり見たくない気がした。父も、居心地が悪くてしょんぼりしているようだった。

ルームミラー

コンビニやスーパーの駐車場でふとまわりの車を見ると、中にチャイルドシートがある。今では全然珍しくないが、僕はそんなものに乗せられたことはなかった。母の自転車の後ろについた子供シートを思い出すくらいだ。

父が運転する車の中では、僕はシートベルトもした記憶があまりない。「前の席はあぶないんだ」が車に乗るときの父の口癖だった。僕はいつも後ろに一人で乗って、前の席の父と母を見ていた。車がカーブすると「うわぁー」と転がって見せたり、ブレーキがかかったりスピードが上がったりすると前後に揺れて見せたり。「ふざけないの」と母にしかられるのも知っていた。楽しかったのだ。どこに行くのかはどうでもよく、父の運転する車に乗るのは楽しかった。ただスーパーに買物に行くだけでも。

僕はよく後部座席からルームミラーを覗き込んだ。運転席側にすこし傾いたミラーを、立ち膝になって覗き込んだ。そこに映る父の顔をみようとしたのだ。当たり前のことだが、運転する父の目はこつちを向いていない。

「後ろ見えないから座ってろ」

ルームミラーの中の父と眼が合うと、決まってそうたしなめられ、僕はあきらめるしかなかった。リアウインドウを確認しようとする僕が視界を遮っているので、邪魔で見えなかったのだ。「ふざけないの」と母にもしかられる。それでも僕は車に乗るとルームミラーを覗き込もうとした。

教習所に通うようになって初めてわかった。運転席に座るとミラーというものが実によく車内や車外の様子を伝えてくれる。今ではあちこちについたカメラが車体の周囲をモニタに映し出す車も珍しくないが、そこまでしなくともミラーは充分いろいろなものを見せてくれているものだった。父が、体を伸ばして覗き込む僕をたしなめたのもよくわかった。ちゃんと見ているんだから、心配するな。ふざけている姿も、眠っている姿も。

父はそんなふうに思っていなかったろうか。運転席に座れば、ルームミラーには後部座席の様子もわりとしっかり映る。父はちゃんと確認していただろう。後方の車も、後部座席の僕も。

洗車

車で走っていると、時折大きな工事現場を見かける。橋の建設、道路整備、宅地造成、そういう現場にあるプレハブの事務所や自動販売機、オレンジと黒の縞々、赤いコーン。父の仕事場もこういうところだったろうと想像する。そういうところはたいがいむき出しの地面で、雨でも降ろうものなら泥だらけになる。

週末家に帰ってくると、父は泥だらけだった。服は適当に着替えているが、洗濯カゴには泥だらけの作業服、玄関には泥だらけの靴、車の後部座席には泥だらけの長靴。そして車そのものも泥だらけだった。ワイパーの届く形にだけ向こうが見えるガラス。タイヤが跳ね上げた泥のスジがドアのところに斜めに走って模様のようにになっていた。

洗車の手伝いをよくした。とても汚れているのに、毎週洗車するわけではなかった。母に促されてようやく、数週間分の汚れをまとめて落とすのだ。まず最初に車内を掃除する。モノを出して古い新聞や週刊誌を捨て、掃除機をかける。運転席のペダルの下は特に土と小石まみれになっていた。靴裏の溝の形に固まった土で遊ぶ僕に、父はマットを手渡す。僕は庭の芝生にそれを置いて箒で叩く。早く終わらないかな、と僕はいつも思った。

手伝いが嫌だからじゃない。車内を掃除した後は車を動かし、すぐ近くのスタンドに行つて洗車機を使う。父は僕を中に乗せたままにして外に出ると、洗車機のボタンを押す。アーチ型の巨大な機械が、敵のロボットのように迫ってくる。ガラスに吹き付けられる水が波のように流れ、巨大なブラシが恐ろしい轟音と共に回転する。僕はその様子を車内で見ている。これがいつも楽しくて、はやくスタンドに行きたかった。

きれいにした車にモノを戻す時、父は靴を軽く洗う。母に言われて僕も一緒に学校の上履きを洗う。僕がその気になつて自分の自転車まで洗い出すと、「おまえもか」と父は笑つた。

子供の頃は、家の周りの道も舗装されておらず、雨の日には水たまりが出来るような砂利道だった。子供の頃は、水たまりや泥道はいたるところにあった。遊んで家に帰ると「泥だらけにして」と母に言われたものだ。そう言われることがなんだか誇らしかった気がする。たぶん、父と同じになつたと思うたのだろう。

追い越し車線

排気量一五〇〇の中古に乗っている僕は、高速道路であまりスピードを出す気にならない。たまに追い越し車線に出ると、後方から近づいてくる車からすぐあおられる。仕方がないので走行車線に戻り、先を譲る。走り去る車の後姿に一瞬、父を見る。

高速道路に入ると、父はいつも追い越し車線を走った。前を走る車が近くなってくると、時々父は言った。

「見てろ、よけるぞ」

僕はヘッドレストにつかまりながら体を伸ばして前方を見る。ナンバープレートの数字がだんだん大きくなってくる。するとその車は左にウィンカーを出してすっと道を譲る。父の言うとおりになった。すこし、父が手品師か予言者のように思えた。

父の車をみるとみんなが思わず道を開ける。道は父のものになる。それは気分がよかった。足が遅くて運動会でいつもビリ、友達にも自転車で追いつけない、そんな僕がこういう気分になれるのは父の車に乗っている時だけだった。やはり、父はヒーローだった。飛ばしすぎなのを気にする母があまりいい顔をしていないのは知っていたけど。

追い越し車線に出たら、そのあととはなるべく速やかに走行車線にもどる。それが規則で、後ろから来る早い車にはなるべく譲るというのはドライバー間の暗黙のマナー。自分で運転するようになるとよくわかる。父の車は特別なわけではなかった。

走行車線に戻って、先を譲る。そうして後方から追い越していく車を眺めながら、ときどき空想してみる。時空が乱れる中で過去と現在が交錯し、遅い僕の車を父の車が追い越して走り去っていく。あの映画のように、車がタイムマシンになって過去へ行ってしまう。父が生きていた頃の過去へ。

そんな空想をするくらい余裕を持って走れば安全だ、と僕は変な納得をしてみたりする。

ライセンス

教習所での全ての課程を終え、県の免許センターに最後の試験を受けに入ったのは、刺すような冷たい空気にちらほらと雪の舞う二月のある日だった。三十分ほど電車で揺られ、教習所で教わったとおりのバス停で、教わったとおりの行き先のバスに乗った。帰りも同じ路線のバスに乗った僕は、ずっと取りたての免許を眺めていた。

家に帰ると、父と向かい合って座った。父はかすかな笑顔でまっすぐこっちを見ている。父の顔の横には、期限が切れて何年もたった運転免許がずっと置いてある。僕はそれを取り、自分の真新しい免許と比べた。カードサイズになった僕のは、父のより一回り小さい。それが相応しいように思えた。

父の免許を仏壇の写真の横に戻す。十日ほど前に母があげたチョコレートが変わらず置いてあった。

好きでよく聴いていた歌の意味が、免許を取ってみると前よりすこし沁みるようになった。長渕剛の『ライセンス』という歌だ。子供の頃の思い出を歌ったもので、ゆったりした静かな曲。詞も自分で書くその歌手の昔が見えてくるような歌。特に、親のことを優しく思い出しているとわかる歌。

その歌の最後の一節を、聴くとなんだか妙な気分になる。悔しい、せつない、哀しい……。この気分はなんだろうかと思っていたが、免許を取って帰った日に聴いて、わかった。羨ましかったのだ。僕にはもうかなわないことだったからだ。

『ライセンス』の詞の最後には、とったばかりのカーライセンスで明日羽田に迎えに行く、とあった。東京に出てきてがんばっている「彼」のところに、両親が遊びに来る。はるばる鹿児島から飛行機で。それを迎えに車で羽田空港へ行く。それが羨ましかったのだ。

僕はもうすぐ、家を離れて大学に入る。もしかしたら、僕のところに父が遊びに来たかもしれない。そのときは、この歌のように僕が迎えに……。そんな想像をしてふと、考え直した。父ならば、自分で運転してくるだろう。車なら数時間だ。父ならば、そうするだろう。もし生きていたら。

免許を取り立てのときは、誰かを乗せて走りたいものだ。それが父だったら――そういう思いはあった。その代わりという悪いが、四月初めに家を離れるまで、母の車を借り、母を助手席に寄せ、買物などの運転をよくした。まずは近場からだ。

代車

レンタカー屋でバイトしたことがある。客が使った後の車を洗車するのが仕事のひとつだ。マットを洗い、車内に掃除機をかけ、固く絞ったタオルで拭き掃除。残されたゴミや吸殻を捨て、車体は水洗いの後手で拭きあげる。

灰皿に吸殻が残っていることが多い。当然、車内にもタバコの匂いが残っている。あまりひどいと消臭剤を使いもする。僕自身はタバコを吸わないが、その匂いをあまり不快には感じない。むしろ、懐かしい匂いだ。

それは、むかし父の車のなかで嗅いだことのある匂いに似ている。父の車はそれこそ、タバコの匂いが充満していた。子供の頃はただ漠然と「父の車の匂い」と感じていたが、それはおもにタバコの匂い、それに汗臭さなどが混じったものだったのだろう。決している匂いではなかったはずだが、子供の頃それを臭いとか気持ち悪いとか思ったことはなかった。

あるとき、父が見知らぬ車で帰ってきた。それはおそらく車検代車だったと思う。同じようなグレードのセダンだったが、車体の傷やシートのコゲなどの特徴がない、妙にこぎれいなところが逆に奇妙にさえ感じたものだ。

その代車で出かけたことを覚えている。記憶に残っている風景をたどると、山の方へ車を走らせて紅葉を見に行ったのではなかったかと思う。「エコーライン」という名のついた山の中のドライブウェイは、勾配がすこしきつく、くねくねと登る道だった。

僕はそのとき、車酔いになってしまった。そこに連れられていったのも初めてだったわけではない。父の運転する車に乗っていて酔った記憶はそのときくらいしかない。「せっかくお父さんとでかけたのに」と、自分がひどく悪いことをした気になって泣いたことを覚えていいる。父や母は僕の具合がよっぽどわるいと思ったのか、その後のドライブの予定もそこそこに、家に帰った。僕は寝かされたが、体調とは別の理由でふさいでしまった。

今思うと、あのときの車の匂いのせいで酔ってしまったのではなかったか。特徴がないといえない、新車のような、新しい布や樹脂や皮の匂い。いつもの父の車の、決している匂いとは言えない、そんな父の匂いがしない。そのせいではなかったか、と。

送り迎え

やはり、母が運転して父が助手席に乗るというのは、違和感があった。

朝、決まった時間に駅まで父は母の運転で行く。僕は学校に行く時間なので一緒には行けない。

夕方になると、六時過ぎ頃の電車で父は駅に着く。僕も一緒に乗っていき、車を降りて父の鞆を持ち、母が運転席で待つ車まで一緒に歩く。父はやけにゆつくりと歩く。助手席に乗り込む動作もゆつくりしていた。

父が毎朝家を出て、毎日夕方の決まった時間に帰る、そんなことはそれまでなかった。夜にはいつも父がいる。不思議な感覚で、僕は毎日が土曜日の夜のように落ち着かなかった。明日は日曜日ではなく、学校が普通にある、と自分に言い聞かせなければならなかった。父は現場での仕事からデスクワークへ異動になった。それが最初の変化だったのだ。

ある朝、駅へ向かういつもの時間よりも一時間半ほど早い時刻に母は父を助手席に乗せて病院にいった。それは父が電車で仕事に行くようになってから3ヶ月ほどたった日だった。父はそのまま入院した。

母は父の車を運転して病院に通った。僕も一緒に乗っていった。母は疲れているように見えた。病室でよく「お父さんの車は大きいから疲れる」と母は言っていた。父は「やっぱりおまえ用の買えば」と返す。

一ヶ月ほどしたあと、父は退院した。医者から言われていた時間に母と僕は迎えに行った。父は玄関の自動ドアを出た後、車まで歩かなかった。母が車をまわして来るまで、待っていた。僕も父の横に立っていた。

僕は、父が治ったと思っていた。退院したのだから。でも父はそれから、仕事に出かけることはなかった。僕が学校から帰ると、朝にいたのと同じソファにすわって、静かに本を読んでいた。父から「お帰り」と言われることにはやはり違和感があった。

ローダー

レンタカー屋では、修理工場や使用者の自宅に車を届ける仕事もある。貸す車そのものを運転して届ける場合には、帰りの足になる別の車と二台一組で走る。使用の終わった車を引き取りにいくのも仕事で、届ける場所と引き取る場所がうまい具合に近かったりすると、二箇所の間をすこし歩いて一人で往復できる。

僕はもっぱら「ローダー」という二・五トンのトラックに乗って車を届けたり引き取ったりしていた。「車載車」とも言う。リモコンのスイッチを押し、荷台を斜めにして道板（アオリとも呼んでいた）を倒し、そこへ車を運転して上げ、バンパー下のフックにワイヤーをかけて固定して、再びリモコンで荷台をあげる。道板を上げて発進、車をどこかに届けて荷台を空にした後、別の場所まで走って車を引き取る。そうして、一日平均一五〇〜二〇〇キロくらいは走った。

そのバイトを始めるとき、車を載せるこういうトラックを「ローダー」と呼ぶと知った。ダウンロードのロード Load や同じく、Loader だ。昔見たことがあって強烈な印象のあるものだったから、名前を知ってふたたびあのときの感覚が甦ってきた。

父が逝って諸々のことが一段落すると、家の車庫には父の車がぼつんと眠っていた。母が使うことになった。母方の叔父さんたちなどは手放すことを勧めたが、母は大丈夫というだけだった。大型のセダンで、母はいつも取り回しに苦労した。スーパーの駐車場に入ると、何箇所かあいているところを尻目にぐるぐるまわって、バック無しで停められて出る時も楽な場所を探した。

しかし、十ヶ月ほど過ぎて車検がくると、母は手放して小型に買い換えることにした。納車の時期がちよとずれて、父の車の引き取りのほうが5日ほど先になったが、それくらいなら母は承諾した。

木曜日の夕方、四時半頃。僕は学校から帰っていた。今日がその日なのだと覚悟していた。家の前に、トラックが停まった。ディーゼルのエンジン音がガラガラと唸る。グレーのツナギの運転手が降りて荷台を斜めに傾け、母から鍵を預かると父のセダンを動かした。ワイヤーで固定された父の車。荷台がゆっくりと上がっていき、水平に近づいていく。その様子を見ていた僕は、いつの間にか泣いていた。

最後の数ヶ月は家にいたが、それまではやはりずっと仕事でいない方が多かった父だ。父のいないことになってしまっていた僕。心のどこかで、仕事でいないことと區別出来て

いなかった自分。病院から自宅、斎場、お寺一運ばれながら姿を変えていく父を見つつ、僕はただぼうつとしていただけだった。父の会社の人たちが泣いているのが、なにか嫌な気がした。

誰も運転席に座っていない父の車が、高い荷台に載せられて、エンジンも鳴らずランプも点かないまま力なく運ばれていく。父がただいだけではないこと、僕はその時初めて感じたのではなかっただろうか。あの車はもう帰ってこない。あのヘッドライトはもう夜の闇を引き裂いて家を照らさない。帰ってこない。

「さようならって、言って」

母がそう言った。僕には言えなかった。「いつてらっしゃい」ではなく「さようなら」。僕は黙っていた。何泣いているの、と母はぼんと背中を叩いた。葬儀のドタバタに翻弄されていた母。その後の生活の変化に精一杯立ち向かった母。

だから僕がそのとき、父が死んでから初めて泣いていたと気付いていなかったのは、仕方なかった。

写真

家にあった何冊かのアルバムをはじめてじっくりと見てみたのは、大学に入るためにまもなく家を離れるという季節のことだった。その頃僕は、それまでのささやかな人生を振り返るように、むかし学校で作った文集や、なぜか取ってあった宿題の日記帳や絵、そういったものをよく眺めていた。部屋を整理しておきなさいという母の言葉に従ってモノを掘り返しては、手を止めて過去の思い出を眺めていた。

そうしているうちに、いままでじっくり見たこともなかったアルバムを開く気になったのだった。

アルバムに貼ってあった数々の写真のなかには、父の写っている写真が思いのほか少なかった。それは、父が早くに逝ってしまったからではない。アルバムはそもそも父が生きていた頃のものだけだった。

写真の多くを撮ったのが父だったのだ。写真に残っているような情景を見ていたのが父だったのだ。

写真の中には、よく似た構図の四枚があった。家の駐車場に停まっている車を写している。その車の前には僕がいる。空が晴れていたり曇っていたり、僕の服装が夏物だったり冬物だったり、そして車の色がシルバーだったり紺だったり、少しずつ様子は異なるが、車の前に僕がいるという構図は同じだった。僕と車をみれば、写された順番はわかる。

最初一枚、母がまだ歩けもしない僕を抱きながら父の車の左前輪あたりに立って笑っている。

次の一枚、僕はプラスチック製のおもちゃの手押し車にまたがって、父の車の左前輪のところまで不機嫌そうによそ見している。

三枚目、僕はやけに手をまっすぐつっぱって左前輪のところに直立している。

四枚目の写真には、父が最後に乗っていた大型のセダンが写っている。巨人の野球帽をかぶった僕はたいした表情もみせず左前輪のところに立っている。

三枚目や四枚目を写した時のことを僕は覚えていた。それはその車が新しく家に来た時に写したものだ。父は嬉しそうに車の中を見せたりした。

そして車の前に立たされて写真を撮るのが決まりのようになっていた。

父のものがいろいろ並んでいる洋室の飾り棚には、真鍮で出来た車型のシガーケースが六つ並んでいる。それは新車を買うたびにオマケで貰ったもの。父は六台の車に乗った。

最初の二台の写真は、アルバムにはなかった。他のものを写した写真の端に入っていることはあったが、その車を写そうとした写真がない。

四枚の写真を見せながら母と話していたら、父が新車の来るたびに写真をとるようになったのは僕が生まれたあとからだと言った。

〈終わり〉